

『就実論叢』第46号 抜刷

就実大学・就実短期大学 2017年2月28日 発行

養護教諭養成における学校の協働事前学習と 演習での相互作用効果の検討

The examinations of effect on interaction between the case study and the group program as Inter professional education in the Yogo Teacher training ; refer to comprehension of Yogo Teacher profession

荊 木 まき子
鈴 木 薫

養護教諭養成における学校の協働事前学習と 演習での相互作用効果の検討

The examinations of effect on interaction between the case study and the group program as Inter professional education in the Yogo Teacher training ; refer to comprehension of Yogo Teacher profession

荊 木 まき子 (幼児教育学科)

IBARAKI Makiko

鈴木 薫 (教育心理学科)

SUZUKI Kaoru

キーワード：多職種連携教育，養護教諭養成課程，自職種理解，模擬ケース会議

要 約

近年「チーム学校」の掛け声のもと，児童生徒支援において，養護教諭はスクールカウンセラー（以下 SC）やスクールソーシャルワーカー（以下 SSW）等の，学校内外の専門家や教員間等のコーディネーターとしての役割が求められている。そのため本研究では，多職種連携教育を通して，養護教諭の自職種理解を異職種の理解と共に検討した。方法として，養護教諭と SC の協働事例を事前学習した上で模擬ケース会議の演習を行った養護教諭養成課程の学生群を事例学習群（14名）とし，演習のみ行った群を事例学習無群（18名）とし，自由記述を数値化し， χ^2 検定にて比較した。その結果，事前学習群に有意差が見られたのは，養護教諭では【問題の早期発見】，【居場所づくり】，SC では【児童生徒の置かれている状況を判断】であった。事例学習無群が多く見られたのは，養護教諭では【心身両面への支援】，SSW では【児童生徒や母親の社会的資源の助言検討】であった。考察より，養護教諭と SC の事例学習を先行することにより，協働過程全体の流れが理解でき，その中での養護教諭の立ち位置や，保健室という場の活用方法が理解された可能性が示唆された。

1. 問題と目的

近年「チーム学校」の掛け声のもと，児童生徒支援において，養護教諭がスクールカウンセラー（以下 SC）やスクールソーシャルワーカー（以下 SSW）等の学校内外の専門家や教員間等の学校内外のコーディネーターとしての役割が求められている。徳山（2011）は，養護教諭が行ってきた健康相談や個別保健指導を学校組織の視点から分析したとき，学校全

体で取り組む姿勢や指導体制の確立が不十分で自己完結的な色彩が強いことを懸念しており，原因として学校の規範・校風・組織風土や学校経営への学校保健の位置付けなど学校側の因子と，養護教諭のコミュニケーション能力や連携など協働的關係を構築する能力を挙げている。

これまで養護教諭養成における異職種や校内連携についての講義や演習についての報告は多くなく，「健康相談活動の理論及び方法（必修）における開講状況」の分析でも，連携に関して扱われていないことが示されている（今野，2010）。その中で，養護教諭養成課程の学生と小学校教員養成課程の学生に対して，多職種連携についての模擬ケース会議教材の開発と試行が，わずかながら報告されている（荊木・森田・鈴木，2015）。その結果として，学生は一定の理解を示すものの，「SCは面接をする人」というような異職種に対してステレオタイプ的な見方に留まることが示唆されている。

SCの理解が「面接する人」に留まるステレオタイプ的な見方を打開する方策として，SCと養護教諭との連携事例の学習を行うことで，学生が「SCはクライアントの置かれている状況を判断する」等，協働相手として異職種をより深く理解できるようになることが示唆されている。これらの結果より，正確な異職種理解には，講義と演習による学習の併用が必要であることが報告された（荊木・森田・鈴木，2016）。しかし，この時点で異職種理解については検討されていたが，養護教諭自身の自職種理解については，検討されていなかった。

同様の演習の効果による養護教諭養成学生の自職種理解については，心身両面の支援者としての役割や専門性，独自性を再確認する理解が示唆されている。連携者としての養護教諭の側面についても，連携相手である教員や専門職の役割の学習は，組織支援における連携者としての養護教諭イメージを形成する効果が見られた（荊木・森田・鈴木，2016）。従来，養護教諭は学校内の常勤職であり，学校全体を見る立場であることから，SCともつながりやすく，SCと養護教諭の協働に関しては，様々な知見が積み重ねられている（伊藤，2003；瀬戸・石隈，2002）。これらの知見において，養護教諭は明確な位置づけがない中で，自分自身の学校内での立ち位置や，連携者としての養護教諭のイメージを確立することが困難な様子が見えがえる。しかしながら，養護教諭自身は，専門的な知識・技術だけでなく，他者との連携を重視して人や集団・組織と積極的に関わり，学校内外でリーダーシップを発揮していくことにより自己効力感を認識している（鈴木・鎌田・淵上，2010）。そのため，養護教諭養成課程の学生が養成段階において，連携者としての養護教諭イメージを理解することは，「チーム学校」の展開において有益な知識となりうる可能性がある。

従って本研究では多職種連携教育の事例学習と演習を通して，養護教諭の自職種理解がどのように見られたのかを，異職種の理解と共に検討した。

Ⅱ．方法

本研究は，以前に作成した多職種連携教育のための模擬ケース会議の教材（荊木・森田・

鈴木, 2015) を, 教職関連科目での全15回の内, 最後の3回を協働単元として, 演習を行った。その際に, SC と養護教諭の協働事例の事例学習を行った群と, 行わなかった群に分け, 検討を行った。以下に, 調査協力者と授業実施者のプロフィール及び, 実施講義の概要, 実施方法の詳細について示す。

1. 調査協力者と授業実施者のプロフィール

調査協力者は, 国立大学の養護教諭養成課程14名の学生を協働事例の事例学習を事前に行った事例学習群 (以下事例学習群と表記), 私立大学の養護教諭養成課程の完全回答であった学生18名を協働事例の事例学習を事前に行わなかった事例学習無群 (以下事例学習無群と表記) とし, 計32名とした。この両者を選んだ理由として, 国立と私立の違いはあるものの, 同じ養護教諭養成課程の学生であり, 履修内容は類似した内容を受けているものと考えられた。そのため, 本研究の事前学習についての差が比較可能になると考えられ, 調査協力者として選択した。事例学習群の学生は, 3回生配当のカウンセリング論の講義であり, 事前に健康相談活動に関する講義を受けている学生も見られた。事例学習無群は2回生配当の必修科目 (健康相談活動) であった。事例学習無群においては, 2回生配当の必修科目 (健康相談活動) であり, 事前知識として学校保健や, 養護概説, 看護学等, 養護教諭に関する様々な基礎的概念について学んでいた。いずれも教育実習前であった。事例学習群の教員 (第1著者) は SC の勤務経験があり, 事例学習無群の教員 (第2著者) は養護教諭の勤務経験があった。

2. 実施時期

講義の実施及び調査は, 事例学習群は2015年7月, 事例学習無群は2016年1月に計3時限にわたって実施された。なお事例学習群に関しては, 第8回目の講義で, 養護教諭と SC の協働事例の事例学習を行った。

3. 倫理的配慮

学生には調査を行う趣旨, 成績には一切無関係であること, 個人名はデータ化して処理し, 一切公表しないことなど, 個人的に不利益を被ることがないとの説明をし, 研究のためのデータ活用の実施許可を依頼した。また, 実施許可の取り消しを希望した学生のデータは, 分析から除外した。

4. 実施方法

(1) 実施講義と事例学習

教職関連及び専門科目での全15回の内, 最後3回を協働単元とした。前段階で事例学習群では, 養護教諭が SC のもとに保健室での対応に悩む生徒について相談を開始する事例を紹

介する事例学習を行った。内容として、養護教諭と SC が連携を取りながら、相談意欲の薄い生徒と関係を構築する状況、生徒の問題を学校全体の問題としてケース会議を設定し、学校全体の情報収集や今後の検討を考える手法、その中で SC がクライアントの置かれている状況を判断する様子や、ケース会議において管理職が医療機関や教育センターへ連絡を入れる様子が学習された。一方事例学習無群では、SC を校内支援者とのみ紹介した。

(2) 演習および調査の実施方法

1 回目は、情報カード実習（柳原, 1976）により、保健室に頻繁に来室する中学 2 年女子が養護教諭にリストカットを告白したことから、養護教諭がケース会議を実施する模擬ケース会議教材を使用した（荊木・森田・鈴木, 2015）。そこでは 5 人班を作り、5 人に中学校の養護教諭、担任、校長、SC、SSW の役割を振った。SSW 役の学生に会議の進行役として、ケース会議の説明を記した指示書を会議方法の説明の時に手渡した。各役割に対しては、各役割から見た当該の女子中学生の様子や見立て、周囲の状況が記載された 6 枚の情報カード、各自の専門的役割やケース会議での役割等を書いた役割カードを渡し、各カードの役割を口頭のやり取りのみで行うことを指示した。まとめた情報を当該生徒の家庭環境や、各専門家や教員の見立て、支援計画について記入するカンファレンスシート（大阪府教育委員会, 2006）に記入し、支援計画を立てた。

2・3 回目は、各班がカンファレンスシートにある項目の「アセスメントの結果明らかになったこと」「確認すべきこと」「長期的な支援計画」「短期的な支援計画」「課題にあった役割分担」を発表した。

調査の実施方法については、①演習実施前、②第 1 回目終了後、③発表終了後に各専門性について、自由記述にて回答させた（荊木・森田・鈴木, 2016）。そして発表後に多職種連携についての解説を行い、「模擬ケース会議を体験したり、他のグループ報告を聞いたりして、養護教諭、SC、SSW の役割や専門性について新たに気づいたこと、考えたこと、疑問におもうこともっと知りたいことなどを自由に書いてください。」という質問を行い、自由記述にて回答を求めた。本研究では、発表終了後の養護教諭、SC、SSW の役割や専門性についての回答を分析対象とした。

(3) 分析方法

発表後の専門性理解についてテキスト化し、教材作成時に各専門領域として著者が想定した部分と、受講生が考えた部分を分けて、キーワードを書き出した。その際、SC の勤務経験がある第 1 著者と、養護教諭の勤務経験がある第 2 筆者が共同して検討し、精緻化を行った。

その後、各キーワードの頻出度数を換算した。各受講生の頻出度数を合計し、事例学習群と事例学習無群とに分けて回毎に χ^2 検定を行い、度数の少ないものは、直接確率検定にて検討した。

Ⅲ．結果

1. 各キーワードの名称と意味

以下にキーワードとして挙げたものを、【 】にて示す。

(1) 養護教諭の専門性に関連するキーワード

こちらが当初から想定していたキーワードとしては、子どもに対して「悩みをきいてあげる」等の【健康相談】があがった。

受講生があげたキーワードは、大別すると「～心のとり木のような存在になり、そこから情報を引きだすと言った機能を果たす」といった【生徒の情報収集】のような養護教諭の学校内外の連携に関するキーワードが見られた。関連するキーワードとして、【校内連携】、【他職種連携】【養護教諭の立場からの意見】【保護者対応】【キーパーソン】が見られた。次に、「居場所をつくってあげる。」といった【居場所づくり】や、「SOSに最も気付ける存在。」といった【問題の早期発見】のような児童生徒に近い存在としての養護教諭の役割や機能に関するキーワードが見られた。関連するキーワードとして、【生徒指導】【常勤による日常観察】【子どもに近い立場】【教育・医療・福祉の立場】【児童生徒理解】が見られた。他にも、「医学、看護、福祉の知識、技術も（一部）あるため、ケガの手当てができる。」といった【けがや病気への対応】のような養護教諭本来の役割のキーワードも見られた。関連するキーワードとして、【保健指導】【心身両面への支援】【危機対応】が見られた。

(2) SCの専門性に関連するキーワード

こちらが当初から想定していたキーワードとしては、「～そしてそこから児童生徒について分析していくような役割があると思いました。」等の【児童生徒の置かれている状況を判断】が見られ、他にも【感情・表現の家庭背景の見立て】、【自殺リスクの見立て】、【今後の支援方針を検討】、【面接可能性の見立て】が見られた。

受講生からあがってきたキーワードとしては、「児童生徒の話を聞く」等の【児童・生徒面接】といったSCのステレオタイプ的なイメージに基づく業務が見られ、関連するキーワードとして【児童生徒の心理的支援】、【保護者面接】が見られた。

他にも、「養護教諭等から得た情報をもとに、分析し」等の【養護教諭との連携】のようなSCの連携者としての役割を示すキーワードが見られた。関連するキーワードとして、【校内連携】、【ケース会議を始めるきっかけ】、【外部的存在】、【心理的見立て】、【面接場面の開拓】、【心理教育】が見られた。

(3) SSWの専門性に関連するキーワード

こちらが当初から想定していたキーワードとしては、「学校としっかり連携をとり、子どもが安心して送れる環境、保護者が少しでも子どもとふれ合う時間を増やすことができる環境

を、支援という形で作っていくことができる存在だと思えます。」等の【児童生徒や母親の社会的資源の助言・検討】が見られ、他にも【校内支援体制構築の助言・検討】【ケース会議の司会進行】【児童生徒や母親の問題解決の助言・検討】【福祉面接設定の指示】が見られた。

受講生から上がってきたキーワードとしては、「生徒や担任、養護教諭、SCたちから得られた情報や対策を集中させ、それらをふまえて総合的な判断、次のステップへとつなげていく役割を担う」等の【校内情報収集】のような校内の情報や資源を集約するような機能が見られた。関連するキーワードとして【コーディネート】が見られた。

他にも「SSWになるための学科というような大学の進路はありますか。」等の【SSWの養成】や【福祉支援】といったSSWの存在そのものを問うキーワードが見られた。

2. 各キーワードの頻出回数と検定結果

以下に各キーワードの頻出回数と検定結果を示す。

(1) 養護教諭の専門性の回答人数比較

演習後における養護教諭の専門性での各キーワードの頻出数において、事例学習群が多く見られたのは、【問題の早期発見】($\chi^2=10.60, df=1, **$)、【居場所づくり】($\chi^2=10.86, df=1, **$)であった。事例学習無群が多く見られたのは、【心身両面への支援】($\chi^2=4.67, df=1, *$)であった(*は、 $p<0.5$ 以下、**は、 $p<0.1$ 以下)。

Table1-1 養護教諭養成学生における養護教諭の専門性の回答人数(n)と割合(%)

	健康相談		校内連携		問題の 早期解決		居場所作り		生徒指導		他職種連携		生徒の 情報収集	
	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%
事例学習群	2	14.3	4	28.6	7	50.0	8	57.1	2	14.3	1	14.3	9	64.3
事例学習無群	5	17.2	8	27.6	2	6.9	3	10.3	1	3.4	2	3.4	13	44.8

Table1-2 養護教諭養成学生における養護教諭の専門性の回答人数(n)と割合(%)

	常勤による 日常観察		養護教諭の 立場からの 意見		保健指導		子どもに 近い立場		保護者対応		教育医療 福祉の立場		児童生徒 理解	
	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%
事例学習群	3	21.4	2	14.3	1	7.1	2	14	0	0	0	0	1	21.4
事例学習無群	7	24.1	4	13.8	3	10.3	6	20.7	6	20.7	3	10.3	6	1.2

Table1-3 養護教諭養成学生における養護教諭の専門性の回答人数(n)と割合(%)

	キー パーソン		けがや病気 への対応		心身両面へ の支援		危機対応	
	n	%	n	%	n	%	n	%
事例学習群	1	7.0	3	21.0	2	14.0	1	7.0
事例学習無群	7	24.1	4	13.8	14	48.3	1	3.4

注) 事例学習群と事例学習無群の回答数における%は、それぞれ完全回答を行った回答者数の合計人数を分母とした(事例学習群14人、事例学習無群18人)。

(2) SC の専門性の回答人数比較

演習後における SC の専門性での各キーワードの頻出数において、事例学習群が多く見られたのは、【児童生徒の置かれている状況を判断】 ($\chi^2=5.04, df=1, *$)、【養護教諭との連携】 ($\chi^2=5.80, df=1, **$) であった。

Table2-1 養護教諭養成学生における SC の専門性の回答人数 (n) と割合 (%)

	感情表現の家庭背景の見立て		自殺リスクの見立て		児童生徒の置かれている状況を判断		今後の支援方針を検討		児童生徒面接		校内連携	
	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%
事例学習群	2	14.3	4	28.6	7	50.0	8	57.1	2	14.3	1	14.3
事例学習無群	5	17.2	8	27.6	2	6.9	3	10.3	1	3.4	2	3.4

Table2-2 養護教諭養成学生における SC の専門性の回答人数 (n) と割合 (%)

	養護教諭との連携		ケース会議を始めるきっかけ		外部的存在		心理的見立て		児童生徒の心理的支援	
	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%
事例学習群	9	64.3	3	21.4	2	14.3	1	7.1	2	14
事例学習無群	13	44.8	7	24.1	4	13.8	3	10.3	6	20.7

注) 事例学習群と事例学習無群の回答数における%は、それぞれ完全回答を行った回答者数の合計人数を分母とした(事例学習群14人、事例学習無群18人)。

(3) SSW の専門性の回答人数比較

演習後における SSW の専門性での各キーワードの頻出数において、事例学習群が多く見られたのは、【児童生徒や母親の社会的資源の助言検討】 ($\chi^2=5.04, df=1, *$) であった。

Table3-1 養護教諭養成学生における SSW の専門性の回答人数 (n) と割合 (%)

	児童生徒や母親の社会的資源の助言検討		校内支援体制の構築		ケース会議の司会進行		児童生徒や母親の問題解決の助言		校内情報収集		SSW の養成	
	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%
事例学習群	8	57.1	2	14.3	5	35.7	0	0.0	3	21.4	1	7.1
事例学習無群	25	92.6	4	13.8	5	17.2	0	0.0	1	3.4	0	0.0

Table3-2 養護教諭養成学生における SSW の専門性の回答人数 (n) と割合 (%)

	福祉面接設定の指示		コーディネート		福祉支援	
	n	%	n	%	n	%
事例学習群	0	0.0	0	0.0	0	0.0
事例学習無群	2	6.9	3	3.4	1	3.4

注) 事例学習群と事例学習無群の回答数における%は、それぞれ完全回答を行った回答者数の合計人数を分母とした(事例学習群14人、事例学習無群18人)。

IV. 考察

1. 養護教諭養成学生の養護教諭理解

本研究において、養護教諭養成学生の養護教諭理解として、事例学習群の回答が多く見られたのは【問題の早期発見】【居場所づくり】であった。一方、事例学習無群の回答が多く

見られたのは、【心身両面への支援】であった。この結果より、事例学習群は SC との協働事前学習を行うことにより、養護教諭が児童生徒支援において、他の教員や SC、SSW と比較して見られる利点や、得意分野に着目する傾向が示唆された。一方、協働事前学習を行わなかった事例学習無群は、【心身両面への支援】といった養護教諭が本来持つ専門性についてのみに着目する傾向が示唆された。これらの視点の違いは、事例学習群が模擬ケース会議の演習だけではなく、SC と養護教諭の協働事例事前学習を行うことにより、協働過程全体の流れが理解でき、その中で養護教諭の立ち位置や、保健室という場の活用方法が理解できた可能性が考えられる。

一方、協働事例事前学習を行わなかった事例学習無群は、模擬ケース会議という限られた場でのみ、他の教員や SC、SSW といった異職種との専門性について理解することとなったため、協働過程全体の流れとして把握することが困難となり、養護教諭本来の専門性を理解するのに留まったと考えられる。模擬ケース会議の実施において、SC 理解が「SC は面接する人」に留まったのも、協働過程全体の流れの中で、SC を理解することが困難であり、ステレオタイプ的な見方に留まった可能性がある。

2. 異職種理解から見た養護教諭養成学生の養護教諭理解

事例学習群が多く見られたのは、SC の専門性理解での【児童生徒の置かれている状況を判断】、【養護教諭との連携】であった。一方、事例学習無群が多く見られたのは、SSW の専門性理解での【児童生徒や母親の社会的資源の助言検討】であった。

事例学習群による SC の専門性理解より、事例学習群の学生は SC を SC 個人としてとらえるのではなく、養護教諭との関連性の中で SC をとらえ、その中から、SC としての役割を理解していることが考えられる。一方事例学習無群は、SSW の役割を、他の専門性との関連の中で考えるのではなく、SSW 個人として、個別に専門性理解を行っている可能性が考えられた。

医療領域の多職種連携教育における効果について、異職種との演習や臨地実習により、自職種の役割や近接の異職種について理解を深めることが報告されている(小河原・安倍・渡邊, 2010)。本研究の異職種理解の結果から、事例学習群はその場で異職種が一堂に会するケース会議の場面だけでなく、そこに至るまでの異職種の動きやその後の各職種の役割を理解することで、異職種についても、養護教諭との関連の中で理解が可能になったと考えられる。おそらく、本研究の受講生は全て養護教諭としての独自の役割を、異職種を理解することでより深まったことが考えられる。その中で事例学習群の受講生は、協働過程を理解することで、より立体的に、異職種と自分の職種を理解するに至ったと考えられた。

今後、教育問題の複雑化とともに、SC、SSW との協働は益々増加することが予想され、養護教諭が、効果ある活動を行うには、人々の力を統合・組織化をはかっていく『人々と連携する能力』がより重要になる。そのために、SC、SSW 資格を持たない学生には、連携相

手がどのような業務をしているかそれぞれの専門性を知り、問題発生時にどのような体制で誰がどう機能したのかなど基礎知識として基本的なプロセスを学んでおけば、現場に出たときに相談活動の流れ・支援のために何が不足しているのかを把握できると考えられる。

3. 本研究の課題と展望

本研究の課題として、各1クラスの小規模データであり、本研究の結果を精緻化していくためには、より多くのデータが必要となるだろう。また、本講義は養護教諭養成学生という学校の多職種協働の中では限られた専門性を対象としているが、養護教諭に限らずチーム支援に関わる全ての職種の課題であり、教職課程や学校支援に関わる関連職種すべてが学習する必要がある。そのため、教員養成課程や臨床心理士養成課程、社会福祉士養成課程の学生等に同様の協働事例の事例学習や演習を同時に行うことが本来の目的であると考えられる。今後は養成課程を超えて学習カリキュラムを構築し、連携先のそれぞれの役割をどのように学んでいくのかを検討することが重要になるだろう。

また、本研究の展望として、本研究によりSCをはじめとした異職種を理解する重要性が確認できた。異職種の活動を理解することは、養護教諭自身にとっても異職種との連携が十分できない場においても、養護教諭の支援活動により多様性をもたらす可能性があると考えられる。異職種を理解することは、異職種と関わる自職種を理解することにもつながり、これらの理解はSCのような異職種と初期の段階でつながる際にも、有用であると考えられる。今後、異職種とつながる際には、養護教諭としてどのように判断していくのかというスキルが問われるのではないかと考えられた。

引用文献

- 荊木まき子・森田英嗣 2015 模擬ケース会議における学習課程の検討—多職種連携教育(IPE)の教材開発— 日本教育心理学会第57回総会発表論文集 579.
- 荊木まき子・森田英嗣・鈴木薫 2015 多職種連携教育における「模擬ケース会議」の可能性—教員養成課程における可能性— 大阪教育大学紀要Ⅳ教育科学, 64 (1), 231-252.
- 荊木まき子・森田英嗣・鈴木薫 2016 スクールカウンセラーに関する事前学習と演習での相互作用効果の検討 日本教育心理学会第57回総会発表論文集, 579.
- 伊藤美奈子 2003 保健室登校の実態把握ならびに養護教諭の悩みと意識—スクールカウンセラーとの協働に注目して— 教育心理学研究 51 (3), 251-260.
- 今野洋子 2010 科目担当者の経験に着目した「健康相談活動の理論及び方法」開講状況の分析, 人間福祉研究, 13, 13-28.
- 森泉清香・大谷尚子 2000 今日の相談活動における「連携」の特徴—「連携」を養護教諭養成教育に取り入れる際の留意点—, 日本養護教諭教育学会誌 3 (1), 96-106.

- 小河原はつ江・安倍由美子・渡邊秀臣 2010 チーム医療教育の実際－群馬大学における実践と評価－, 臨床病理, 178-182.
- 大阪府教育委員会 2006 SSW 配置小学校における活動と地区での活用ガイド, 大阪府教育委員会, 児童生徒支援課.
- 瀬戸美奈子・石隈利紀 2002 高校におけるチーム援助に関するコーディネーション行動とその基盤となる能力および権限の研究 : スクールカウンセラー配置校を対象として教育心理学研究, 50 (2), 204-214.
- 鈴木薫・鎌田雅史・淵上克義 2010 養護教諭の自己効力感の形成に及ぼす学校組織特性の影響 (第1報) —学校組織における養護教諭の自己効力感の認知構造— 日本養護教諭教育学会誌, 13 (1), 17-26.
- 鈴木薫・荊木まき子 2016 養護教諭養成における学生の多職種連携に対する認識—「模擬ケース会議」経験後の感想— 就実教育実践研究, 93-100.
- 徳山美智子 2011 健康相談活動を進めるための養護教諭と他職種との連携—他 (多) 職種連携を学校経営に生かすために「何をすべきか」「これからどうするか」— 日本健康相談活動学会夏期セミナー資料, 16-57.
- 柳原光 1976 クリエイティブ O.D. プレイスタイム.